# ２．洋書を活用した英語学習

## （１）洋書を活用した多読に係る実践研究

大阪府教育庁では、平成 26・27 年度「英語教育推進事業」において、府内７中学校を研究協力校に指定し、「洋書を活用した英語学習の実践研究」を行いました。

※研究協力校

能勢町立西中学校（当時）、能勢町立東中学校（当時）、
柏原市立堅上中学校、松原市立松原第二中学校、和泉市立槇尾中学校、
泉佐野市立長南中学校、大阪市立今宮中学校

各中学校では約 800 冊の洋書を整備し、洋書を活用した多読に係る指導技法の実践研究に取り組みました。

「多読」とは、単語の意味、文法、表現の細部にとらわれることなく、物語の要点を把握させ、ストーリーを楽しみながら英語の「量」を読ませる取組みのことです。速く、訳さず英語のまま、なるべく辞書を使わず読み、英語を英語のまま理解することで、英語の語彙力、表現力の向上を図ります。また、「読むこと」に加え、他の３技能（聞くこと、話すこと、書くこと）と関連した活動を設定することで、生徒の総合的な英語力の育成にもつなげるものです。

## （２）洋書を活用した授業

### ①洋書活用の流れ

洋書を活用した英語学習というと、いきなり授業で洋書を読むことをイメージするかもしれません。しかし大切なのは、普段から生徒が多くの英語に触れ、英語を読むための「素地」づくりをしておくことです。

例えば、授業中は、教員は基本的に英語を用いることとし、英語を使って生徒に指示をしたり、生徒と簡単な会話をしたりするなど、生徒が英語を英語のまま受け入れる感覚を養うようにします。また、発音と綴りの関連に着目した指導方法（フォニックス）を用いて、英語の「読み方」を生徒に教え、生徒が自ら読むという感覚を養うようにします。

その上で、次のような段階を踏まえて洋書を活用すると、大変効果的です。

| | |
|---|---|
| STEP 1 | 洋書活用のねらいの共有することで、洋書活用のメリットを理解させる |
| STEP 2 | 教員による読み聞かせ、音読により、本を読むことへの興味をもたせる |
| STEP 3 | ペアやグループで読むことで、本読みの楽しさを体感させる |
| STEP 4 | 個人で読むことで、自分の興味関心に合わせて読ませる |

### ②洋書活用のポイント

＜STEP 1＞

洋書活用の主なねらいは、次のとおりです。

1．自然な文脈の中で使われる多くの表現に出会い、未知の単語や表現の意味を類推しながら読み、言葉が現実にどのように使われているかを知る。

2．多くの英語に触れることにより、英語を英語で理解しようとする習慣を身に付ける。

たとえ、多くの洋書を速く読めるようになったとしても、内容が理解できていなければ意味がありません。学級でねらいを確認し、洋書活用によってどのような力がつくのかを共有しておくといいでしょう。

参照 ☛p.7 能勢町立西中学校の取組み

＜STEP 2＞

実際に洋書を読む、といっても、最初から生徒が自力で読み進めるのは難しいかもしれません。まずは洋書を読むことへの興味を喚起し、生徒が意欲をもって読めるような工夫を行うと効果的です。

**◆読書前：「意欲の喚起」**

タイトルや表紙のイラストから得られる情報をもとに、洋書に対する生徒の興味を喚起する活動を行います。読書の前に、次のような生徒への問いかけを行うなど、洋書の内容と生徒の経験や既習の知識をつなぎ、読むことに対する意欲を高めることが大切です。

（例）

・表紙に掲載されている登場人物をさしながら、「What's her name?」などと問いかけ、思い出させる（シリーズものの洋書の場合）

・表紙の絵を見ながら、「What does Jim have in his hand?」「He has a pen.」などのやりとりをする。

・習ったフォニックスの知識を使って、初めて見るタイトルを読んでみる。　等

**◆読書中：「音読」**

音声と文字を意識した活動をします。洋書を活用して、自然な英語表現に多く触れながら、音読することにより、インプットからインテイク（定着）の効果を高めることが期待されます。

a. **モデル提示**

音源を活用したり、教員が読み聞かせをしたりするなどにより、生徒自身が「めざすモデル」を認識できるようにします。

b. **全体音読**

a.のモデルをベースに、生徒が音読に挑戦します。この段階を丁寧に繰り返し、できればリード・アンド・ルックアップまで実施すると、次の活動に生きてきます。

c. **バズリーディング**

生徒一人ひとりが自分のペースで音声化（音読）に挑戦します。

d. **ペア（グループ）リーディング**

ペア（グループ）で互いの音読を聞き合ったり、教え合ったりして、読みのブラッシュアップを図ります。

**◆読書後：「コミュニケーション」**

内容理解を深めるため、読了後に、本の内容に関するコミュニケーション活動を行うと効果的です。内容に関するＱ＆Ａや、要約、さらには話の続きの創作など、クラスで、ペアで、グループで楽しみながら取り組むことで、一層の効果が期待できます。

参照　☛p.9 柏原市立堅上中学校、泉佐野市立長南中学校の取組み

＜STEP 3＞

教室全体で洋書を読むということに慣れてきたら、ペアやグループで協働的な活動を取り入れます。

ペア読みでは、２人で１冊を協力して読んだり、２冊を交互に読んだり、わからないことがあれば教え合うなどして読み進めます。読了後には、洋書の内容に関するクイズを出し合ったり、感想を言い合ったりします。グループ読みは、ペア読みと同じですが、少し長めの洋書を読む時に有効です。

参照　☛p.9 和泉市立槇尾中学校の取組み

＜STEP 4＞

STEP 3 に慣れてきたら、または並行して、個々の生徒が自分の力に合った洋書を自ら選び、自分のペースで読み進める活動を取り入れます。辞書や友だちの力を借りずに、前後の流れや挿絵などをヒントに、類推しながら読み進めます。この時、教員は、生徒が自分の力に合ったものを選んで読んでいるかチェックし、必要に応じてアドバイスをすることが大事です。

参照　☛p.8 大阪市立今宮中学校の取組み

**③環境整備**

生徒が自分の興味や能力に応じて洋書を選べるよう、できるだけたくさんの洋書を整備することが必要となります。また、英語教室や学校図書館等に、難易度に応じて整理して配架しておくと、生徒が選びやすくなります。

参照　☛p.8 能勢町立東中学校の取組み

しかし、実際には、このような環境を整えることは難しいかもしれません。その場合、無料で絵本や読み物をダウンロードできるサイトを利用したり、１つ前の学年の教科書を利用したりするなど、生徒にとって読みやすい教材を用意し、「これなら読める、分かる、できる。」という体験を重ねられるように工夫することが効果的です。